

学園都市づくり交流会議では、東広島市における学生等の学術研究活動を促進し、大学と地域が連携したまちづくりの推進に寄与することを目的に東広島市の地域課題を研究した論文を募集・表彰する「地域課題研究懸賞論文事業」を実施しています。

この度、令和元年度の受賞論文について、厳正な審査の結果、6件決定しました。

なお、受賞論文については、著者個人の意見であり、学園都市づくり交流会議及び東広島市の公式見解ではありません。

## 令和元年度地域課題研究懸賞論文 受賞論文（佳作②）

### 研究課題名（テーマ）

「西条とんどマップ」の開発—東広島市旧西条町内における悉皆的な「とんど」調査を通じて—

広島大学大学院 教育学研究科 横川 知司

令和元年度地域課題研究懸賞論文

# 「西条とんどマップ」の開発

—東広島市旧西条町内における悉皆的な「とんど」調査を通じて—

広島大学大学院 教育学研究科

横川知司

キーワード

地域資源, ガイドマップ, 伝統行事, 地域調査, とんど, QGIS

## I. はじめに

### 1) 研究の目的

本研究の目的は二つある。第一に、東広島市旧西条町（以下西条町とする）における新年の伝統行事「とんど」の悉皆調査を行い、その分布と実態、また「とんど」本体の形状の多様性を明らかにすることである。西条町は、従来の都市化地域と農業地域だけでなく、近年の人口増加に伴い近郊の農業地域が都市化・宅地化しつつある。「とんど」の分布やその形状は、このような地域性やその変化という地理的条件が影響していることを示す。第二に、上記の成果をもとに、当市の伝統・文化である「とんど」を効果的に理解できる学習材を開発することである。具体的には、撮影された各地域の「とんど」の写真を使い、視覚的に楽しく学べる「西条とんどマップ」を作成する。

西条町は近年特に人口が増加している地域であり、新住民が既存の地域コミュニティに参加できることは重要な課題であると考え。とんどは一種のお祭りであるが、新住民にはとんどを知らない人も多く、とんどの焚き上げで発生する灰や煙などが原因となり、元々地域に住んでいた人々とトラブルとなることもあると聞く。また、実際にとんどをつくっている地域の人々も、自分たちの住む地域以外のとんどについては、日程的な面などから知りようがなく、よくわからないというのが実態であるようだ。加えて、学校教育において、地域に即した、地域の

魅力や課題を考えるコンテンツの提供が求められている。本報告はこれらの課題を解決できるものである。

一人でも多くの人々がとんどに興味を持ち、価値を再認識し、とんど祭りに参加する人々が増え、自分たちが普段生活する地域に愛着を持つ・地域コミュニティ形成の契機なることが、本報告の最終的な目的である。

### 2) 研究の方法

調査は2019年と2020年の2回実施した。具体的には以下の通りである。

①2019年調査では、1月6日から2月24日にかけて「とんど」やその焼け跡を探して西条町内をくまなく巡り、2月以降は地域住民への聞き取り調査を継続し、最終的に、90ヶ所を超えるとんどの分布を明らかにした。

②2020年の調査にあたり、前年より網羅的に調査することを意図した。事前準備として2019年12月14日以降、とんどを実施する日時を特定した。具体的には、前年の結果をもとに地域の住民に聞き取りを行うとともに、小学校や自治協議会には電話にて日時を伺った。また、2019年に実施していたとんどが、2020年には中止が予定されていた場合は、その地域の方に聞き取りを行い、中止となった理由を明らかにした。

③事前調査の結果、とんどは同日程、同時刻に、異なる場所で一斉に行われることが判明した。そこで、教育学研究科の大学院生や、教育学

部・文学部・法学部などの学部生に協力を依頼し、計10名(横川知司・岩佐佳哉・原田歩・山本航平・西口颯真・神田颯・富田大智・畑添真一・大出洸起・山本茂将)の調査チームを編成した。また、調査者により結果が異なることを防ぐため、調査票を作成した。とんどの当日に訪れることができなかつた箇所については可能な限り、追加調査を行った。ただし、2月1日以降行われるとんどについては、現時点(2020年1月31日)では調査を行っていない。

- ④メンバーから提出された個々のとんどの調査票や撮影されたとんどの写真、聞き取りの結果をふまえ、生涯学習や地域学習などに活用可能な「西条とんどマップ」を作成した。「西条とんどマップ」は、撮影した各地域のとんどの写真をできるだけ提示し、形状の多様性を視覚的に理解できるように工夫した。

## II) 既存の研究

### 1) とんどの概要

そもそもとんどとは何なのだろうか?既存の研究から説明する。加藤ほか(2009)によると、門松や注連縄など正月を彩った様々な飾りを集めて焼く行事が小正月(こしょうがつ)を中心に行われており、この総称を民俗研究では「小正月の火祭り」という。小正月は1月14日から15日の頃であり、1月1日を大正月と呼ぶこと

に対して言われた言葉である。とんどはこの行事の一種であるが、地域によって異なる名前と呼ばれ、左義長やさいと焼きなどともいわれる。田中・宮田(2012)はこの「小正月の火祭り」の地域的な分布と呼び名を整理している。それによると、東北地方では「どんと焼き」、甲信越、関東などでは道祖神の信仰と結びつき「道祖神祭」や「さいと焼き」、北陸や西日本各地では平安時代以降行われた宮中行事に由来すると言われる「左義長」、関西地方を中心に「とんど焼き」、九州では「鬼火焚き」「ホゲンキョウ」と言われている。その他にも、長野県の安曇野地方や伊那地方、静岡県伊豆北部では「オンベ焼き」といわれ、長野県の中信地方には「サンクロウ」と呼ぶ地域がある。特定非営利活動法人 地域資料デジタル化研究会のデジタルアーカイブ班が小正月の行事の全国的な調査集計を行っており、この分析によると、「小正月の火祭り」は国内の全都道府県で実施されており、日本の国民的行事であること、またその名称は全国でほぼ「どんと焼き」と呼ばれていることを確認している。またとんどという言葉の由来については、田中・宮田(2012)は、火が燃える様子を現す囃子詞から来たともいわれるが、左義長の「とんどやとんど」という唱え言から変化したとも解されていると説明している。いずれにせよ、とんどの由来や起源については諸説ある。

言い伝えなどについては民俗学研究所編(1953)に詳しい。例えば、書初めをとんどの火に燃やして空高く燃え上がれば、手があがる

(字が上手になる) しるしであると広く広まっていたと言われる。他にもとんどの火にあれば若返りという地域もあれば、立てた柱が倒れる方向を見て1年間の吉兆を占う地域もある。とんどの火で団子を焼いて食べると1年中病気をしないという話は全国に及んでいる。

とんどの目的については、加藤ほか (2009) によると、「小正月の火祭り」は歳神様をお送りする行事ということに加え、約廟や災厄を免れるために行われたと考えられる、と説明している。加えて、こういった行事は、地域ごとに行われてきたが、近年は学校のグラウンドなど学校教育の一環として位置付けられたものもあるとしている。

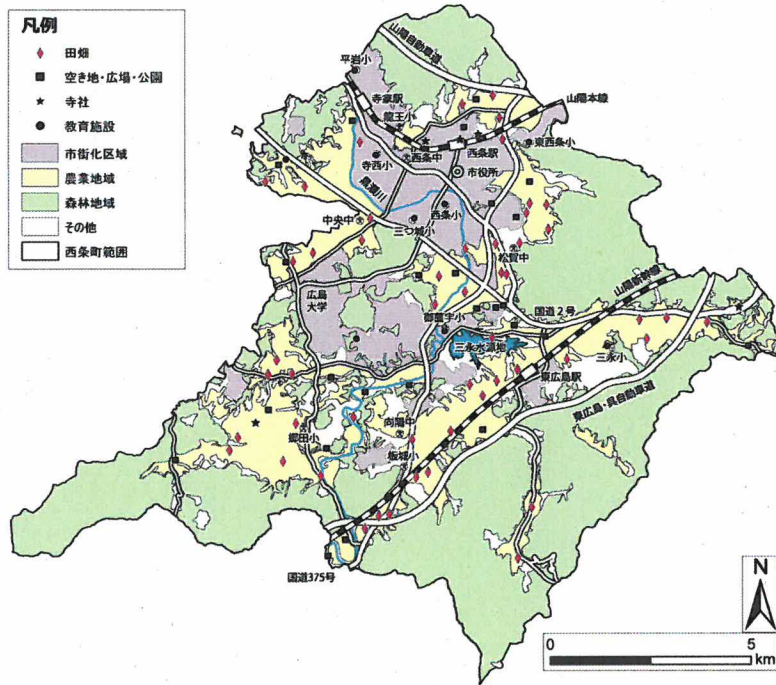
## 2) 東広島市のとんど

では、東広島市ではとんどはどのように説明されているのだろうか？西条町誌編纂室(1971)には以下のように説明されている。とんどは「神明」「左義長」とも言い、江戸時代には、少年たちが竹や藁・シダ(ウラジロ)などを持ち寄って、神社の境内や河原・空き地などにとんどを建て、種々の色紙で飾り、夕方より火をつけ、東土法成就(とんどうや ほうじょうじゅ)と叫びながら焼くとされている。この囃子詞については、『起源不詳であるが、古の朝廷で正月十五日青竹を束ね清涼殿の庭にたて、扇子短冊主上の吉書などを結びつけ、陰陽師に囃させこれを燃やすことあり』と説明されている。また、とんどの火であぶった餅を食べると悪い気を除

くと言い伝えられており、長い竹先に挟んであぶって食べたとされる。なお、このような風習は室町時代より一般民家で行われるようになったと言われている。阿部英樹(2014)によると、とんどは年に一度無病息災を祈って行われ、田に長い竹を組んでとんどを作り、注連縄や書初めなどを焼き上げたと言われている。東広島の文化や歴史・人物などを整理した東広島市郷土史研究会(1997)によると、とんどは第二次世界大戦後一時的に行われなくなったが、間もなく復活し、新暦の1月14日に近い日曜日を利用して行われるようになったと言われる。とんどの製作から焼き上げまでの期間は、地域により異なり、2~3日前に作る場所もあれば、製作した日の午後に点火するところまで様々であったようだ。近年は新年の予祝行事としてよりも、地区の親睦会の様相を呈しているとされる。

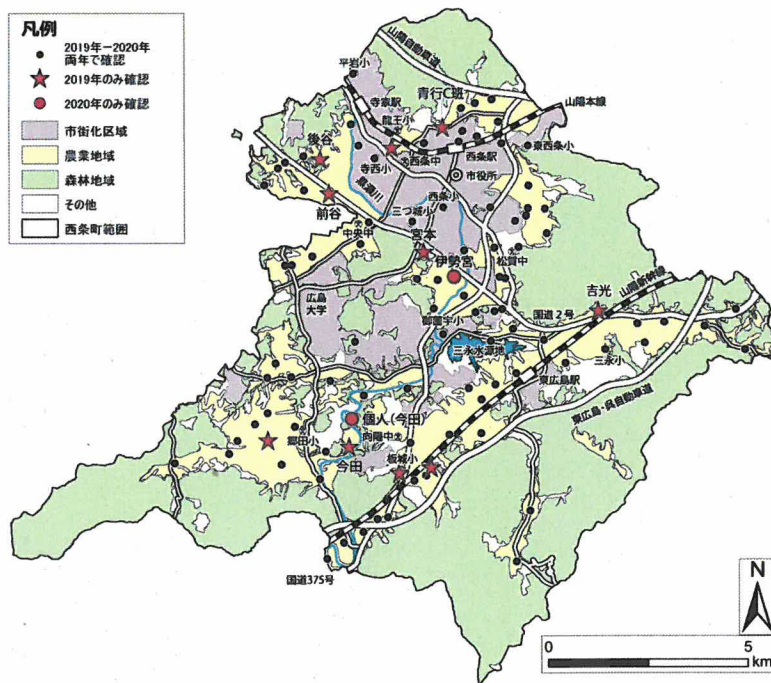
## Ⅲ) 西条町内に分布するとんどの実態と課題

本章では、現地調査により明らかになったとんどの分布を示すとともに、60ヶ所で行った聞き取り調査の結果からとんどの実態や課題を明らかにしていく。図①に2020年に確認されたとんどの分布をその立地別に示した。図②は2019年と2020年の分布を比較したものである。なお、2020年2月1日以降に行われるとんどは14ヶ所あり、これらは予定ということになるが、



図① 西条町内に分布するとんど（2020年）

資料：筆者の現地調査により作成



図① 西条町内に分布するとんど（2020年）

資料：筆者の現地調査により作成

予定通り行われたものとして記述する。

#### 1) 西条町内におけるとんどの分布

2020年には、西条町内では合計91カ所をとんども確認した(図①)。とんどもは火の粉を飛ばすため、周囲に建物や燃えるものがない、開けた場所で行われる。とんどもの設置場所を見ると、田畑が51ヶ所と最も多く、空き地・広場・公園が25、教育施設が9、寺社が6と続く。なお、田んぼでとんどもを行う場合、田起こしをせず稲株を残したままにする。耕すと土が軟らかくなり、とんどもが立てにくく、参加者も歩きにくくなるからである。

土地利用との関係から見ると、西条町内のとんどもは水田が広がる農業地域で広くみられ、西条駅南側などの市街化区域では少ない。森林地域は、人が住んでいないため、分布は見られない。農業地域で行われるとんどもは、田畑が大部分を占め、次に空き地・広場・公園と続く。農業地域にある小学校は3つあるが、とんどもが行われているのは三永小学校のみである。市街化区域で行われるとんどもは、寺社や教育施設(学校など)で多くなっている。これは周囲が都市化や宅地化しているため、とんどもに適した場所は、学校のグラウンドや寺社の境内・駐車場などしか残っていないためであろう。現在市街化区域となっている地域でも、かつては田畑が広がっており、とんどももよく行われていたと現地調査中に聞いた。例えば、円通寺の住職は、「かつては西条駅の南側の通りでもとんどもを行って

いた」と語る。

市街化区域にある7つの小学校では、とんどもを行っていない龍王小学校を除き、学校行事としてとんどもを行う、もしくは校庭がとんどもを行う場所として提供されている。

御菌宇小学校では、伝統行事、日本文化の体験を目的に学校行事としてとんどもが行われているが、御菌宇出身の70代男性は、「御菌宇小学校が再開した1981年当時は、御菌宇小学校ではとんどもは行われていなかった」と語っており、御菌宇小学校出身の40代男性によると、「今から約20年前に、御菌宇地区の都市化の影響で、とんどもを行う場所が確保できなくなった周辺の地域住民の要望があった。これに郷土学習を兼ねて、とんどもが行われるようになったのではないかと述べている。

寺家にある寺西小学校では、少なくとも10年以上前から寺西塾という団体がとんどもを行っている。とんどもの主目的は、住民同士の交流促進であるが、寺西小学校で行う理由は、他に適した場所がないからと述べており、寺家地区の都市化の影響を読み取れる。

平岩小学校では、平岩住民自治協議会や小学校の教職員・PTAなどが協力して学校行事としてとんどもを行っている。地域と学校の繋がりや地域の伝統文化の継承を兼ねているのだという。ただし、近年の宅地が進出してきており、とんどもの場所の確保という点で不安を感じると述べている。

東西条小学校では、東西条住民自治協議会が

グラウンドを借りて、住民同士の交流促進を主目的にとんどもを行っている。学校行事ではないので、児童は登校日ではないが、250人を超す子供が参加していた。「新しい住民が地域に参加するきっかけになればよいかな」と代表者の方は語る。なお、龍王小学校の教員に聞くと、地域の方から「龍王小学校でもとんどもを行わないか」という話はあったようだが、校庭が特殊な土という理由もあり、現時点では行われていないと説明している。

以上のことを整理すると、市街化区域では、とんどもはもともと地域の田畑などで行われていたが、都市化や宅地化などによりとんどもに適した場所が減少し、小学校に場所を変え、継続しているとみられる。市街化区域では、住民の社会増加が続き、比較的若い人が多いのも特徴で、当地のとんどもは児童の地域学習のためだけでなく、住民同士の交流の場や新住民が地域コミュニティに参加する契機としての役割を果たしていると言える。

逆に農業地域の小学校で行われるとんどもが少ないのは、地域にとんどもを行うための場所が十分にあり、小学校で行いたいという地域の要望が発生しにくいのが一因でないかと推測される。

## 2) とんどもの廃止要因の検討—2019年と2020年の分布の比較を通じて

2019年には99ヶ所で、2020年には91ヶ所でとんどもが行われていた(図②)。重複などを除くと、2年間で、合計101ヶ所でとんどもが行わ

れていることを確認した。2年間継続しているとんどもは89ヶ所であり、2020年に中止(未確認含む)になったのは10ヶ所、再開したのは2ヶ所となっている。

2020年に再開したのは個人(今田)、伊勢宮となっている。個人(今田)は例年この場所で行っているが、去年は諸事情により行わなかった。伊勢宮は2019年もとんどもを行う予定であったが、直前に地域の方が亡くなられたため中止になったという話である。つまり、再開した2ヶ所は、偶発的な理由で去年行わなかったということになる。

2020年に中止(未確認含む)になったとんどものうち、明確に中止が確認されたのは後谷・前谷・宮本・吉光・今田の5ヶ所であり、それぞれ理由が異なっている。

後谷地区は、近くの集落に住む男性(70代)によると、「耕作放棄地の増加により、火災のおそれが強いため、今年は中止になったと聞いている」とのことである。筆者が後谷周辺を調べたところ、確かに耕作放棄地は発生していた。これは高齢化の問題が背後にあり、地域の活動が維持できなくなっていることを示しており、とんどもの中止という形で現れたのではないだろうか。

前谷地区はとんども予定地の近くに住む60代男性に確認したところ、「風でとんどもの一部が民家まで飛散し、苦情が来たことが原因の一つ」と話している。前谷地区は農業地域に位置しているが、その東部に位置する黒瀬川左岸の寺家



地区が市街化調整区域を外れ、宅地化の進行が著しく、その影響が出ているとみられる。加えてとんどの開催に対する新住民の理解が低いことを示している。

宮本地区では、2019年には、宮本池の西側でとんどを行っていたが、周辺の宅地化が著しく、とんどに適した場所がなくなり、2020年は中止になったとのことである。

吉光は近くに住む70代男性に伺ったところ、「音頭をとる人がいなかった影響が大きいかな。最近、神社の注連縄が藁製からビニール製になり、燃やす必要がなくなったので、無理してやらなくても良いかという流れになった」と話している。これはとんどを運営するリーダーのような存在の不在を指摘できる。

今日は「町内会での集まりで、投票した結果、今年のとんどは行わないことになった」と語っており、後ほどその理由を尋ねたところ、高齢化による担い手不足の問題と、まとめ役の不在について語られている。

また、西条駅の北側に青谷という地区がある。ここのC班が2019年にはとんどを行っていたのだが、本年は未確認となっている。去年の調査の際、とんどに参加している人々に聞いたところ、「もしかしたら今年が最後かもしれん。周辺の都市化がすごいので、なかなか場所がない」と話されていた。

以上の内容を、そのとんどの立地条件という点から整理すると、農業地域に位置する地点のとんどでは「高齢化による担い手不足」やそれ

に伴う「耕作放棄地の増加」、「リーダーの不在」が課題となり、農業地域と都市化地域の境界部に位置するとんどでは、「とんどに適した場所の不在」や「新住民の理解」が主要な課題であるといえる。

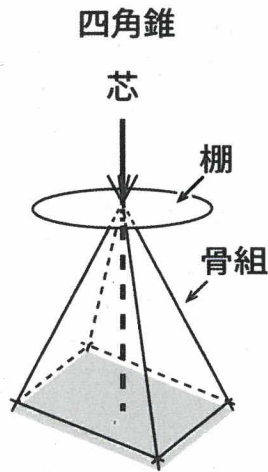
#### IV) 西条町内で見られたとんどの形状

現地調査や地域の方からの提供などにより、62ヶ所のとんどの写真を入手した。本章ではこの62ヶ所を中心に考察する。採録された写真と聞き取り調査の内容を踏まえて、西条で見られるとんど本体の形状の分類を行った。また、それぞれの分類の分布を示すとともに、焚き上げ日程との関係を考察する。

なお、2019年と2020年の両方の写真があり、その形状が異なる場合は2020年の写真を利用した。本調査で得られたとんどの写真は別添資料とした。

##### 1) 西条町で見られるとんど本体の分類

分類する前にとんど本体を構成している要素を整理する。図③を用いて、上から順番に説明する。まず、中心にあり、地面から真っすぐ上に立てられている竹を芯（シン）という。西条では2~3本であることが多いが、写真のように1本の時もあれば、5本以上というものもある。また芯がない場合もある。この場合は、次に述べる支柱の部分が伸びて、芯の役割を果たしている。



図③ とんどの模式図

資料：筆者作成

芯を支えている部分を支柱という。多くのとんどは、4本の支柱からなる四角錐である。ただし、3本の支柱からなる三角錐から作られるとんどもある。

屋根のように、中心に乗っている部分を棚(タナ)という。棚は縦に切断した竹を、円形に加工して作られ、檜の葉などで飾られる。西条では棚がない場合、もしくは1つあるのが多いが、2つある場合も一部確認できた。

次にとんどの表面に飾られているものを見ていく(写真④・⑤)。とんどの表面を「ハカマ」という。ハカマは檜、杉、松や竹などの葉をちり詰めたもの、ウラジロや藁で覆ったものなどが確認された。複数を組み合わせているものもある。そしてハカマの表面に正月飾りや古い札、亥の子に用いた御幣、門松などが、珍しいものでは鳥居がつけられていることもある。

以上の内容を踏まえると、まず骨組みが「四



写真④ ハカマ 大沢のとんど



写真⑤ ハカマ 大沢のとんど

角錐か三角錐、またはそれ以外の形状」で大分類をすることができる。そして「芯の有無」「棚の有無」でとんど本体の形状を分類することができる。この基準をもとに、撮影されたとんど62基が、それぞれのパターンに当てはまるのかを示したものが表⑥である。なお、分類に関しては、製作中や燃え落ちる間際の写真などを活用して、複数の写真から行った。

調査の結果、西条では四角錐の骨組みを持つとんどが58基と大部分を占め、そのうち「芯有、棚有」のものが27基と最も多く、「芯有、

表⑥ 西条町内におけるとんどの形状分類表

骨組みの形状	芯の有無	棚の有無	西条で見られた個数
四角錐	有	有	27
		無	23
	無	有	
		無	8
三角錐	有	有	
		無	
	無	有	1
		無	1
その他	有	有	
		無	1
	無	有	
		無	1

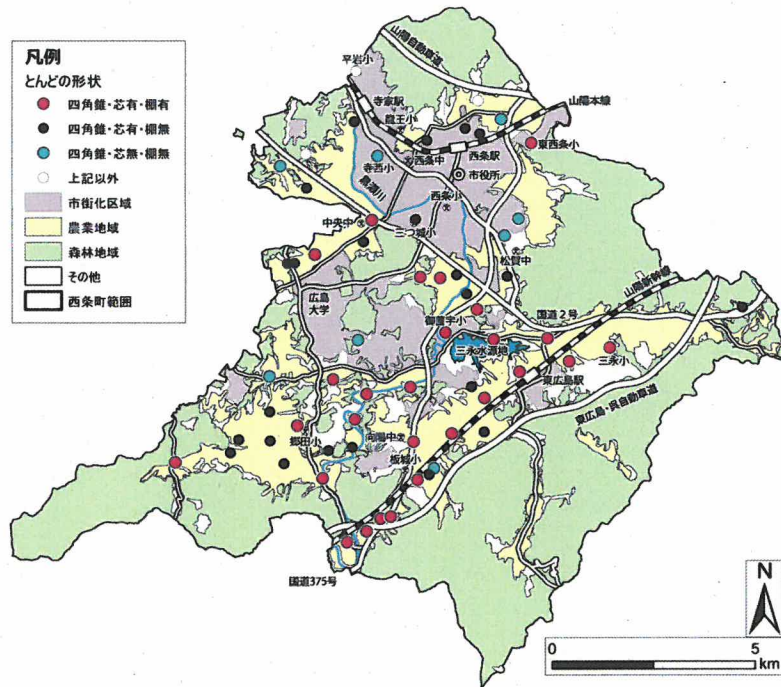
棚無」が23基、「芯無、棚無」が8基と続く。三角錐は「芯無、棚有」と「芯無、棚無」のそれぞれ1基ずつ、その他の形状は四角形の形状を持ち「芯有、棚無」のものが1つ、また、「芯無、棚無」が1つ確認された。

棚の有無について補足すると、棚をつける年もあればつけない年もあるという地区が、聞き取り中散見された。下見7組は、2019年は棚が付いていたが、2020年は棚が無かった。聞き取りによると、「2019年は焚き上げる1週間前に組み立てを行い、飾っていたが、2020年は日程面の調整がつかず、当日に焚き上げることになったので、簡易的なものにした」ということを話していた。棚の製作には手間がかかることを考えると、おそらくは棚がある方が伝統的なものである可能性は高い。しかし昔から棚をつけないという地区も多数あることから、断定することは難しい。

## 2) 特徴毎に見たとんどの分布と焚き上げ日程との関係

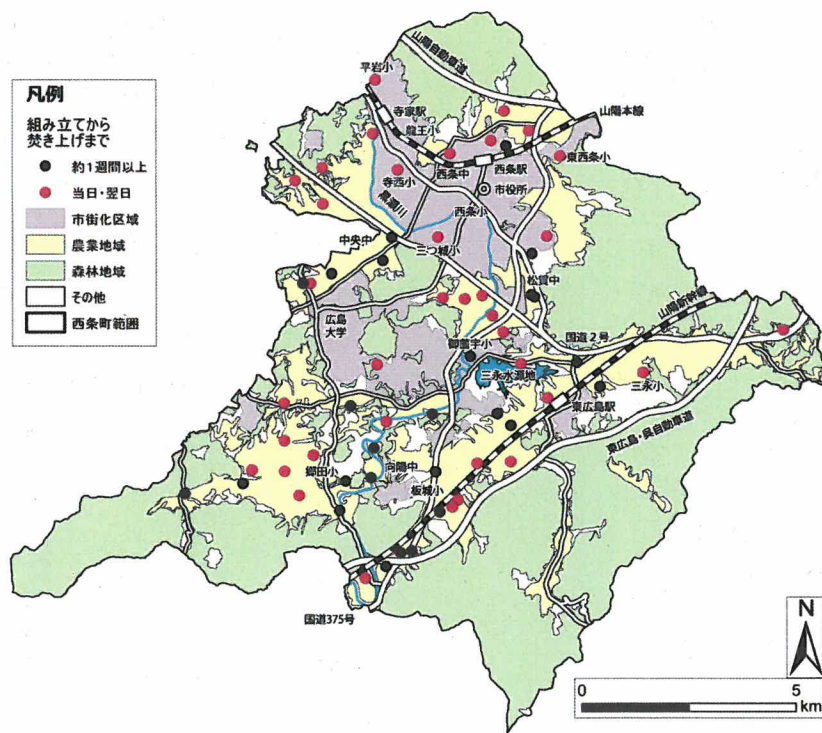
前項により分類されたものを地図にプロットしたものが図⑦である。図⑦をみると、「四角錐・芯有・棚有」タイプは西条町南部の農業地域を中心に、「四角錐・芯有・棚無」タイプは西条町の広範囲にわたって、「四角錐・芯無・棚無」タイプは西条町の北部の市街化地域を中心に分布していることが読み取れる。この地域的な差異がどうして生じたのかは、十分に明らかにしえないものの、一ついえることは、「四角錐・芯無・棚有」というタイプは無いことである。つまり、とんどの伝統的なタイプとみられる「四角錐・芯有・棚有」から、簡略化しようとする、製作に手間のかかる棚を作らないことであろう。さらに簡略化した形態が「四角錐・芯無・棚無」といえそうである。このことから、旧来からの農業地域では伝統的なとんどを製作する一方で、製作に手間のかかる棚は、地区の事情で省略されることがあるのではなかろうか。「四角錐・芯無・棚無」となると、さらに担い手の不足あるいは都市部であるので、大きな竹の確保が難しいことも考えられる。

図⑧は組み立てから焚き上げまでの期間を、1週間以上飾る場合と製作した当日もしくは翌日のうちにわけて、それを地図に示したものである。1週間以上飾られるとんどは、広島大学の北にある下見一帯や西条町の南部に比較的多く分布する。また、製作した当日・翌日に焚き上げられるとんどは、西条町の広範囲に分布す



図⑦ とんどの形状別の分布図 (2020年)

資料：筆者の現地調査により作成



図⑧ 組み立てから焚き上げまでの日程別とんど分布図 (2020年)

資料：筆者の現地調査により作成

るものの、北部のとんどで多くみられる。また、土地利用別に分布を見ると、市街化区域で見られるとんどの大部分は当日・翌日に焚き上げられるものである。農業地域には、1週間飾られるとんどの大部分が分布しているだけでなく、当日・翌日に焚き上げられるとんども多くみられるなど、混在する。

また、表⑨はとんどの分類と組み立てから焚き上げまでの日数をクロス集計したものである。1週間以上飾るものと、当日・翌日に焚き上げるものを比較している。傾向として、「四角錐・芯有・棚有」タイプは1週間以上飾られる場合が多いこと、「四角錐・芯有・棚無」、「四角錐・芯無・棚無」タイプは製作した当日や翌日に焚き上げられる傾向が強い。三角錐やその他のタイプは1パターンしかないので傾向は示せない。この理由として、伝統的なとんどといえる「四角錐・芯有・棚有」タイプを立てるところは、昔からの習慣が続いており1週間以上立てると考えられる。一方、「四角錐・芯有・棚無」、「四

表⑨ とんどの形状と日程のクロス集計

組み立てから 焚き上げまで とんどの 分類	当日 翌日	約1週間 以上	総計
四角錐・芯有・棚有	11	16	27
四角錐・芯有・棚無	15	8	23
四角錐・芯無・棚無	7	1	8
三角錐・芯無・棚有	1		1
三角錐・芯無・棚無	1		1
その他・芯有・棚無		1	1
その他・芯無・棚無	1		1
総計	36	26	62

角錐・芯無・棚無」タイプは、伝統文化の維持と人々の日々の暮らしとの兼ね合いで、とんどの形状や日程などを簡素化したものと考えられる。しかし、簡素化したとはいえ、伝統文化の持続的な継続を目指したものともいえよう。

本章の成果としては、以下の3つが挙げられる。

第一に、西条町内に分布するとんどの形状を「骨組みの形状」、「芯の有無」、「棚の有無」という観点から、「四角錐・棚有・芯有」「四角錐・芯有・棚無」「四角錐・芯無・棚無」「三角錐・芯無・棚有」「三角錐・芯無・棚無」「その他・芯有・棚無」「その他・芯無・棚無」の7パターンに分類できることを明らかにした。「四角錐・棚有・芯有」が27基、「四角錐・芯有・棚無」が23基、「四角錐・芯無・棚無」が8基と四角錐が9割以上を占めており、残りのパターンはそれぞれ1つであった。

第二に、上記の結果を地図にプロットし、その分布の傾向を読み取った。「四角錐・芯有・棚有」タイプは、西条町南部を中心に、「四角錐・芯有・棚無」タイプは西条町の広範囲渡って、

「四角錐・芯無・棚無」タイプは西条町の北部を中心に分布していることが読み取れる。また、土地利用別に分布を見ると、「四角錐・芯有・棚無」タイプは農業地域を中心に、「四角錐・芯有・棚無」タイプは市街化区域と農業地域に、「四角錐・芯無・棚無」タイプは比較的都市地域に分布していることが読み取れる

第三に、とんどの形状と組み立てから焚き上

げまでの日程のクロス集計を行い、傾向を明らかにした。「四角錐・芯有・棚有」タイプは比較的長期間飾られる場合が多く、「四角錐・芯有・棚無」タイプや「四角錐・芯無・棚無」タイプは製作直後に焚き上げられることが多い傾向を示していた。

#### IV. 特徴的なとんどの紹介

筆者が調査したとんどの事例の一部を事例集として報告する。とんどの大きさや形状などに着目して、とんどの実態を見ていこう。

##### 1) 大きさから見たとんど

とんどの高さや幅は一定ではなく、立地の条件や作り手の意図、参加者の数などによって大きく左右される。ここでは、西条町内で発見されたとんどのうち、最も高い、最も低い、最も幅が小さい、最も幅が大きいとんどを紹介する。

##### i) 最も高いとんど

計測できたものの中では、三永小学校で作られたとんどが最も高い(写真⑩)。今年は高さ約20mの孟宗竹(もうそうだけ)を芯に用いて製作した。横幅は約4.5mであり、上につくタナは3.5mの大きさであった。去年の高さは24-25mであったとされるので、今年は少し小さくなったが、それでも20mを超えている。材料の制限もあり、高さは一定ではないようだが、かつて



写真⑩ 三永小学校のとんど



写真⑪ 三永小学校のとんど集合写真

は高さに挑戦していたこともあり、27.5mのとんどを建てたこともあるとのことである。このとんどは、小学校の行事であり、地域の郷土学習を兼ねているものであるため、小学生は登校日となっている。在校生265人に加え、教職員・地域の人々なども含めると、600人以上の参加者となっている(写真⑪)。豚汁をつくるの

だが、大きな鍋は10個も用意されていた。

このとんどを運営しているのは、小学校とPTA、三永自治協議会、教育推進連絡協議会のメンバーである。教育推進連絡協議会とは、PTAの元会長などによって構成された組織で、地域と学校を繋ぐ役割を果たしている。元々、小学校、PTAが三永自治協議会と協力して行っていたとんどであったが、諸事情により中止されそうになったため、教育推進協議会が中心に行うようになった。それ以降学校行事ではなかったようだが、数年前に学校行事に戻ったとのことである。教育推進連絡協議会の方によると、協力してくれる若い人は多いが、縄を扱い、本体をつくれる人が少なくなったと語られており、技術の伝承が大きな課題であるようだ。

## ii) 最も低いとんど

最も低いとんどは今田地区の個人が作られていたもので、高さが5m弱、幅が約160cmのものである(写真⑫)。小さいとんどではあるが、とても丁寧な作りをしていて、ハカマは檜の葉で覆われ、タナが取り付けられている。写真ではわからないが、檜の葉で覆われたハカマの内部には、半分に来た竹がきれいに敷き詰められていた。見えない部分に対するこだわりを読み取れる。芯が一本真上に伸びており、ハカマ・タナ・芯がきれいに見えるある意味典型的なとんどである。

集落のとんどが、町内会の投票の結果、今年度は中止になった。そのため、こちらの個人と



写真⑫ 個人(今田地区)

んどに参加する人もおり、ハカマの部分を少し大きくしたという。しかし、周辺の民家との距離が近いため、あまり大きなとんどは作れないということである。そもそも、もともと個人(少数)で行うとんどであるため、大きさはあまり重要なことではないのであろう。

## iii) 最も幅が広いとんど

最も幅が広いとんどは、御菌宇小学校の校庭に2基作られた親子とんどのうち、おとなとんどの方である(写真⑬)。御菌宇小学校では、伝統行事・日本文化の体験を目的として、地域学習を兼ねて、学校行事の一環としてとんどを行っている。元々は各地区でやっていたが、都市化などの影響や地域の繋がりを意識して、約20年前から小学校の校庭で行われるようになった



写真⑬ 御菌宇小学校の親子とんど

とされる。

とんどの運営には、教職員約30人、PTA約80人、御菌宇住民自治協議会の約30人が関わっており、とんどの組み立てや、餅や飲み物の準備を行う。これらの費用は、PTAの会費や自治協議会の援助などによって賄われている。

実際に作られたとんどを見ていこう。おとなとんどは、高さが20m弱、幅が約7.5mという巨大さを誇り、約5mのタナがついていた。こどもとんどは高さが約7m、幅が約3.5mであった。これらは、1月18日(土)に組み立てられたが、焚き上げが1月25日(土)であるので、グラウンドに1週間ほど飾られることになる。聞くところによると、元々大きなとんどを2つ作っていた。去年は1つにしたところ、餅を焼く場所が足りないなどの問題が起こったので、今年は2つ作った。ただ、大きなとんどを2つ作るのは大変なので、親子とんどのような形にしたとのことである。今年作られたとんどは、どちらも四角形の骨組みを組んではいたものの、最終的には円錐型になっている。ハカマの表面は檜



写真⑭ 異文化交流を行った

の葉で覆われ、点火しやすいように藁を周りにまいている。ハカマの内部には、檜・杉・松などの木材が詰められていた。ハカマの表面には、注連飾りや門松御幣のほか、児童が書いた書初めが大量につけられていた。これらの材料は地域の方の協力によって賄われている。周辺地域のとんどより1週間遅くしているのは、とんどの材料を分けていただくためだという。なお、正面は恵方を向いていた。

御菌宇小学校のとんどでは、国際交流も兼ねている(写真⑭)。JICA(独立行政法人国際協力機構)に招待された外国人の方が、日本文化の体験として毎年訪れている。2020年は、外国人の数は48人であり、加えてHIC(広島国際センター)から2人、韓国で日本語を教えている大学教授が1人引率で来ていた。小学生は、物おじせず留学生の人と遊んでおり、留学生は積極的に餅つき・餅焼など、とんどの行事に参加しているのが印象的であった。

韓国の留学生にインタビューを行ったところ、「韓国にはこのような火祭りはなく新鮮である。



また、韓国で祭りといえば、観光要素の強いものをイメージするので、このように地域のコミュニティ単位で行われるのは興味深く、貴重な体験をさせていただいた」と感謝していた（写真）。フィリピンの留学生は、「カトリック文化の祭りはあるが、このような祭りの体験は初めてで楽しい。フィリピンにも、rice cake というお餅のようなものはあるが、日本のものとは異なっている。餅を竹で焼くのは新鮮な感覚だ」と話されている。中国の北部から来た留学生は「私の住む地域の近くには、中心に火をつけた石炭を置き、その周りを3周回れば1年間無事に過ごせるという風習があった。このような火祭りはあるが、竹を使うのは日本的に感じる。」と語った。とんどが国際交流の場になっている事例でもある。

#### iv) 最も幅が小さいとんど

筆者が確認した中では、馬木上郷にあるとんどが最も幅が小さい（写真⑮）。高さは7mほどで、幅が1m弱である。ハカマはウラジロで、タナは檜の葉で覆われている。

このとんどは馬木上郷に住む6軒の人々により行われており、焚き上げ当日には8人の参加者がいた。なお、子供は0人であった。とんどの大きさは元々これくらいであったされ、馬木上郷は範囲が狭く、人口が多い地区ではないので、大きなとんどを必要とはしなかったようだ。人数は少ないことにより、一人一人の距離感が近くなるのが利点であろう。実際、調査中もほ



写真⑮ 馬木上郷のとんど

ぼ全ての人と話すことができ、非常に丁寧に対応して下さった。ちなみにこの地域のとんどの課題には、高齢化もあったが、意外にも一番は材料の入手であった。檜の葉とウラジロが手に入りづらいのだという。

#### 2) 神事色が強いとんど

西条には、神事色が強いとんども確認された。御建神社の北で行われた大地面のとんど、下三永の若宮八幡神社のある福本地区のとんど、寺家にある新宮神社のとんどの3つを紹介したい。

##### i) 大地面とんど祭り

大地面（おおじめ）池の北側の空き地で大地面とんど祭りが行われている。西条住民自治協

議会通信「さいじょう」(平成27年2月号)によると、2015年までは大地面とんど祭り実行委員会という有志の団体が行っていたが、現在は大地面地区常会と西条地区常会から選出された役員による実行委員会が行っている。おでんや甘酒など2日間かけて200人分ほど準備される。この準備は2つの常会による持ち回り制であるようだ。この地区は、新しく移り住んできた人が多く、実行委員会によると、とんどに参加している人の割合は、昔ながらの住民:ここ10年で移り住んだ住民=3:7くらいではないかとされる。

大地面とんど祭りでは、焚き上げを行う前日に骨組みが作られ、当日に飾り付けがなされる。このとんどは高さが約10m、幅が約3mである

(写真⑩)。参加人数は多いのだが、これ以上とんどを大きくすることは、周辺の環境から難しいとのことである。とんどは、芯を1本置き、骨組みを作り、その四方から支えている竹と一緒に巻き付けてつくられている(写真⑪)。ハカマは竹の葉で覆われており、焚き上げまでに正月飾りや書初めが飾られ、とんどを囲うように紙垂で取り付けられる。また、作られたとんどは、正面が南にある。これは、北にある竜王山に向けて建てているためであり、毎年この方向でつくられるとのことである。

2020年の大地面とんど祭りは1月12日(日)の13時に始まった。このとんど祭りでは御建神社の宮司が参加するのが特徴的である。実行委員会の挨拶に続き、御建神社の宮司によるお



写真⑩ 大地面のとんど



写真⑪ 大地面のとんど(製作中)



写真⑱ 御建神社の宮司によるお祓い



写真⑲ 振る舞われる おでんや甘酒

祓いが行われる(写真⑱)。その後地元の県議会議員の挨拶があり、13時半頃から焚き上げが始まった。焚き上げの後、おでんや甘酒が振る舞われ、燗(おき)ができたからお餅を焼き始める(写真⑲)。なお、実行委員会によると、参加者は約165人(去年は約130人)で、そのうち約60人が子供であった。

この地域のとんどの課題としては、高齢化による担い手不足に加えて、新住民の理解が挙げられていた。新興住宅の新住民にも常会に入る人と入らない人がいること、とんどのに対する理解に差があることが課題だという。とんどの維

持に関しては、とんどに適した場所の確保という点で不安があると語られた。大地面池の水利権が、田んぼを作らなくなったため、東広島市にため池の権利が移っている。ため池をつぶして、周辺が住宅地になると、とんどができる場所がなくなってしまう可能性がある。

## ii) 福本区のとんど

下三永にある千足池の下流部に福本地区がある。この地区を流れる松板(まついた)川の右岸沿いの農道(空き地)にとんどが作られている。このとんどは福本地区に住む約50戸の住民によって営まれている。福本地区は、新興住宅はできておらず、新住民はほとんどいない。とんどの参加者は、昔からこの地域に住む人々が大部分を占め、残りはその親戚などであるが、新世帯も少数の参加がみられた。とんどの日程などは、区の総会で役員が決めるのとことであり、女性会が甘酒を、子供会が豚汁などの準備を行う。

福本区のとんどは、事前に材料などを用意し、焚き上げ当日の朝から組み立てる。ここでつくられるとんどは高さが約8m、幅が約2.5mであり、ハカマがウラジロで覆われているのが特徴的である(写真⑳)。また、とんどの四方に竹が建てられ、縄で結界のようにとんどを囲い、さらに紙垂をつけていく。そして、神棚が設置され、お供え物が飾られる。正月飾りなども取り付けられていくのだが、この地区では飾り物の位置は細かく決められていた。例えば、破魔矢



写真⑳ 福本区のとんど

は東南東の位置につけられており、熊手は恵方の方角から少しずらしている。なお、とんど本体のサイズは変わっていないものの、少し前と比較して簡単な作りになったとのことである。

福本区のとんどは、1月12日(日)の15時から始まった。若宮八幡神社の宮司が祝詞をあげ、榊を供えるなど儀式が執り行われ、その後焚き上げられる。どうやら、ここでも餅を焼くということは共通のようで、餅を焼くための竹は多数用意されていた。

この地区においては、とんどの課題は現時点では、特にないようである。ただし、将来的なことを考えると、若い人の参加が増えることが望ましいと、地域の方は話されていた。

### iii) 新宮神社のとんど

寺家にある新宮神社でもとんどが行われている。今回、新宮神社の宮司にお願いし、とんどに同行させていただいた。その内容を一部報告する。

1月14日(火)の17時30分からとんどが始まった。1月14日は正月にお迎えした年神様が帰られる日であり、たとえ大雨・大雪が降っても、必ずこの日に行うとのことである。とんど本体は当日の朝につくられたもので、古いお札やお守りなどが取り付けられている。ちなみに、新宮神社では去年の飾られた門松が焚き上げられ、今年の物は1年間保管するのだという。

新宮神社では、祝詞を3ヶ所であげてから、焚き上げが行われる。まず、宮司が住む住宅にある、年神様を迎えた年神棚に向かって、祝詞をよみあげる。次に、拝殿内の、正式参拝で入る区画で祝詞をよみあげ、榊を奉納する。この際、無事にとんどが焚き上げられるよう、火事などが起こらぬよう火の神様にもお祈りすることである。最後に、とんどの正面で祝詞をよみあげる。ちなみに、正面は恵方(2020年は西南西)を向いており、ここから火がつけられる(写真㉑)。焚き上げ後、燠ができれば餅を焼いて食べる。

新宮神社のとんどは、宮司とその家族の手によって行われており、地域の人は焚き上げの際に2人来ただけである。参加者は筆者を除けば、計5人であった。とんどを行う目的が神事であるので、人数が少ないことは、問題ではないの



写真⑳ 燃え上がる新宮神社のどんど

だろう。実際、とんどの課題について伺うと、現時点では特にないとのことである。

### 3) 一風変わったとんど

とんどの形状は一定ではなく、地域差が大きい。また設置場所も予想外の場所にあるものも確認された。ここでは、西条町内で発見されたとんどのうち、一風変わった特徴を持つとんどを紹介する。

#### i) 棚が2つあるとんど

下三永にある為重造園の前にあるとんどは、タナが2つついている(写真㉒)。西条町内では、現時点で、ここだけで確認されている珍しいタイプである。円錐状であり、ハカマは上部が檜、下部が竹となっており、円状に加工した



写真㉒ 加計画のどんど

竹で抑えている。門松や正月飾りが取り付けられるだけでなく、折り鶴や輪飾りなどもあり、さながらクリスマスツリーのようである。

このとんどは集落でつくられるというわけではなく、個人でつくられているもので、参加するのは親族と親しい友人のみで、合計29人であった。焚き上げは元々旧暦で行っていたが、友人の仕事の都合上、近年は1月の第3日曜に固定されているとのことである。とんどを製作するのは第1日曜なので、天気にもよるが、2週間飾ることになる。

ちなみに、代表者の方によると、1月7日は山に入ってはいけない日と伝えられているので、遅くとも1月6日までに材料集めを行うとのことである。この地域では1月7日が「山の神」の日に当たるのであろう。「山の神」の日は山の

神様が、山の木を一本一本数えると言われており、漁師や炭焼きなど山で仕事をする者はこの日は山に入ってはいけないという話がある。

## ii) 巨大な骨組みを持つとんど

2019年1月の中旬に、郷曾にある石神八幡神社の隣に、巨大な骨組みを製作中のとんどを発見した(写真⑳)。高さも20m近い巨大なとんどである。

このとんどは、市の畑地区に住む22軒の人々の手によって運営、製作されている。とんどの製作は、竹原出身の70代男性の主導の下で行われる。年明けに行われる集落内での会合で材料確保の分担や日程などが決められ、材料が準備されると竹を中心に据えて、骨組み状にとんどもを組み立てていく。見栄えを良くするために、竹の上部に日の丸の扇子を配置し、タナの部分に赤と白の紙垂(しで)を取り付ける。この地区の棚は非常に丁寧に作られており、下から見てもその美しさがわかる(写真㉑)。やぐらの組み立てた後、内部に檜・杉などの木材を詰めていく。この内部に詰めるものを市の畑や近くの上柏原では「ドブ」といい、最後に餅を焼くための良質な燠となる。木材の周囲に竹の枝を取り付けることで内部の設営は完了となる。次にハカマを飾り付けていく。先ほどの竹の枝の隙間に、檜の枝を差し込み、檜の葉が表面に見えるように固定する。最後に各々が正月飾りを取り付けていくと、とんどの飾り付けは完成である。



写真㉑ 市の畑のとんど



写真㉒ 市の畑のとんどの棚

ただし、2020年のとんどは材料の都合などにより、少々小さくし簡略化したものを作ったと、地域の方から伺った。

## iii) タナがハカマより大きいとんど

東西条小学校の校庭に作られるとんどは、高さは12-13mで、幅は500cmほどある(写真㉓)。しかし最大の特徴は8本の竹で支えられた大きなタナであり、なんと直径620cmもある。棚の方が大きいパターンはそんなに数が確認されおらず、珍しい。ハカマは竹と藁で構成されており、タナは竹の葉で覆われていた。芯は5本に見えるが、実は1本で、残りの4本は土台に



写真⑳ 東西条小学校のとんど



写真㉑ 東西条小学校で餅を焼く人々

なっている四隅の竹が伸びているだけである。

このとんどを主催しているのは、東西条住民自治協議会の地域活性化部会であるが、学校でやるということで、学校の先生やPTAの人々も参加されている。ただし、三永小学校などと異なり、学校行事ではないため、児童の出席日に

はなっていない。しかし、筆者が数えたところ参加者は400人以上で、そのうち250人以上の子供を確認したことから、東西条小学校の多くの児童が参加していると思われる（写真㉑）。

#### iv) 設置場所が特殊なとんど

田口コミュニティスポーツ広場に作られたとんどは、一風変わった場所に作られる（写真）。なんとテニスコートに作られ、テニスのポールを利用して固定されていた。とんどの大きさを見ると、幅は約5.2m、高さは14-15mであった。ハカマの大部分は竹の葉で覆われ、残りは藁がつけられており、タナの表面は檜の葉である。タナの上には菰が巻かれており、そこにはいこので使ったとみられる御幣や破魔矢などが取り付けられていた。

このとんどを作るのは、東子の子供会と自治会であるが、今年は子供会の都合がつかず、自治会を中心に製作した。とんどの運営は自治会費で賄っており、焼き物やおつまみなども用意された。



写真㉒ 東子のとんど

## VI 「西条町とんどマップ」の開発と研究 成果の活用方法

本章では、前章までの検討で明らかになったとんどの分布や実態、および本体の形状をもとに、「西条町のとんどマップ」の開発を行うとともに、本研究で得られた成果の活用方法について検討する。

### 1) 「西条町のとんどマップ」の構成と作成方法

ここで開発するガイドマップは、生涯学習を指向する一般市民や地域の新住民が、本市の伝統行事であるとんどを、視覚的に楽しく学べるよう作成した。また、学校教育現場での使用も念頭に置き、開発した。

#### i) ガイドマップの構成

ガイドマップを構成する要素は、①地図、②ランドマーク、③とんどの位置、④日程表、⑤とんどの模式図、⑥とんどの写真の6つである。①-③は地図に関することであり、筆者らが作成したオリジナルな地図である。①地図の基盤は、傾斜量図と水域を重ねて作成し、鉄道や国道などの主要道を追加しており、地形条件を把握することができる。②ランドマーク、③とんどの位置については、市役所と広島大学、高速道路などのICやJRの駅に加えて、小中学校をプロットした。これにより、小学生も自分の学校の位置を基準にとんどの分布をみることができる。④日程表をつけることで、とんどがどの時期に多いのかを一目で把握できる。⑤模式図をつけ

ることで、文章での理解に加え、とんどの作り方や形状の違いを視覚的に理解できる。また⑥とんどの写真についてはとんどの形状が理解できるように、とんどの全景を写したものを選定した。また、⑤の模式図や他の写真と比較することで、注目したとんどの特徴を適切に把握できる。加えて、写真の下部に番号・場所、焚き上げ日時、とんどの種類、コメント、写真撮影日という情報を追加した。特に、番号は地図内にある番号を示しており、これにより写真のとんどがどの場所に立てられたのかを把握できる。

#### ii) ガイドマップの作成方法

上記の構成物を作成した方法について述べる。①地図の作成に関しては、QGIS2.18.19を使用した。国土交通省が提供する国土数値情報の閲覧マニュアルでも使用が推奨されているフリーの地理情報システムである。基盤地図に関しては、国土地理院の数値標高モデル (DEM) を活用し、西条町を包括する傾斜量図を作成し、鉄道と水域・河川は、国土数値情報ダウンロードサービスの、鉄道データ、湖沼データ、河川データをそれぞれ使用した。道路網については、Open Street Map のデータを使用した。Open Street Map は誰でも自由に利用できる、編集機能のある世界地図を作る共同作業プロジェクトであり、作成された地図データは無償で利用することができる。②ランドマークや③とんどの分布はGoogle Earth でマッピングを行い、KML ファイルに変換したものをQGIS上で加工した。④日程



表は聞き取り調査から判明した日程であり、Excel で元図を作成し、Adobe Illustrator CS6 version16.03 (以下AI とする) を用いて加工した。なお、AI はガイドブック本体や⑤とんどの模式図の作成にも使用された。⑥の写真は、筆者が実際に撮影したものが大部分であり、一部は地域住民の提供によるものである。

## 2) 研究成果の活用方法

「西条町とんどマップ」を中心に本研究の成果は『市民生活』『文化芸能』『教育』『環境・景観』『都市景観』などの多様な分野での活用が想定される。本節では、特に、『生涯学習やまちづくり』や『文化芸能』、加えて、『学校教育』という視点から、研究成果の活用について考察する。

### i) 『生涯学習やまちづくり』『文化芸能』における活用

まず生涯学習とまちづくりの関係について整理する。文部科学省によると、『「生涯学習」という言葉は、一般には、人々が生涯に行うあらゆる学習、すなわち、学校教育、社会教育、文化活動、スポーツ活動、レクリエーション活動、ボランティア活動、企業内教育、趣味など様々な場や機会において行う学習の意味で用いられます。また、生涯学習社会を目指そうという考え方・理念自体を表していることもあります。』と説明している。

次に、まちづくりに関してみると、川上光彦氏

はその著書の中で、『それぞれの地域や都市における住みよき、活気のある環境を形成することを目的として、それを担う人々を形成するための各種の努力や運動、環境整備を進めるための各種の制度および枠組みの形成、さらに様々な物的および社会的な環境を形成したり整備したりする過程、およびそれらを維持、活用していくための努力や運動を意味している』（『まちづくりの戦略』山海堂、1994、p2）と定義している。

ここで、地域活性化のための生涯学習政策の在り方を示唆した田中（2004）によると、まちづくりはひとづくりであるとし、まちづくりはキーとなる人物が必要であり、それは生涯学習を指向する人々の中から生まれると指摘している。寺本（2012）は『これまでの都市・農村整備が行政や開発企業の手で進められてきたのに比べ、自律的に都市や農村の住民自体が「まちづくり」を意識し、愛着のもてる住みよきまちづくりをしていく必要性が生じて来たのである』と述べている。加えて寺本（2012）は、まちづくりに関してそこに暮らしている人の関心や知覚、愛着を呼び覚ますという視点が必要であるとしており、この愛着はまずは知ることにより形成されると主張している。換言すれば、生涯学習のよき地域を学ぶ活動は、まちづくりを導く担い手を育てる下地となる。

生涯学習とまちづくり、文化芸能に関して、東広島市教育委員会による東広島市教育振興基本計画では、第3章の第3節の基本目標を「生涯にわたる能力開発と学びによる豊かなまちづ

くりの実現」とし、その基本的な考え方として「市民一人ひとりが生涯にわたって学び続け、必要とする様々な力を養い、その成果を社会に生かすことができる生涯学習社会の構築は、これからの本市のまちづくりに必要不可欠です。」としている。また、第5節「歴史・文化の継承と新たな市民文化の創造」では、具体的な内容を「本市の歴史・文化の正しい理解のために欠くことのできない文化財を次世代に継承し、公開活用するとともに、市民が優れた文化芸術に触れ、主体的に参加できる環境を整備することにより、個性的で文化の薫り高いまちづくりを目指します。」と定めている。

しかしながら東広島市の生涯学習には課題も多い。2013（平成25）年に行われた「生涯学習のアンケート調査」の結果では、今後の学習活動に必要な支援の第1位が「学習活動に関する情報提供（58.5%）」と際立っている。

さらに、東広島市が、2017年6月6日から6月30日の間に、無作為に抽出した東広島市民1000人に対して行った歴史文化に関するアンケート調査の結果を見ると、市民の関心のある文化財・文化遺産では「祭り・民俗芸能（29.7%）」と一定数の希望があることが分かる。また、文化財の保存や活用のために、自ら協力できる事項の第1位が「イベント・祭りへの参加（57.1%）」、第2位が「地域活動への参加（38.7%）」と際立っている。

以上の内容から東広島市の課題を整理すると、

1) 地域の伝統や文化を学習することのできる

地域資源の発掘、保護、情報提供が必要とされていること、

2) 住民が文化財について楽しみながら学び、保存活用に気軽に参加できる場が今後必要とされていること、  
という2点が挙げられる。

本研究はこれらの課題を解決し得るものである。本研究では地理学的なフィールドワークを通じてオリジナルデータが多数集積され、地域資源の発掘という点では十分に意義があったと言える。西条中のとんどを調べ、分布を示したことは、西条中に伝統行事であるとんどを地理学的な分布でとらえ、全体的な傾向を把握できるという点で特筆すべきことである。またとんど本体の写真を62基採録したことは、無形文化財であるとんどの伝承の一助となり得る。

本研究で開発された「西条町とんどマップ」はとんどの分布を示す地図に加え、伝統行事であるとんどを、写真や模式図を多用して視覚的に理解できるよう製作されている。国土地理院の街歩きマップコンテストHPによると、『「街歩きマップ」は、自分たちが住む街の歴史、文化、自然、工芸、祭り、郷土料理、温泉などの情報を地図にまとめたもので、魅力ある街づくりや観光客の誘致などに欠かせない地図資料となっています。』と説明している。とんどは自分たちの住む町の文化でもあり、祭りでもあることから、今回製作されたガイドマップは「街歩きマップ」の形態を満たすと言える。ここで、東京23区内のJR主要駅を対象に、地域街歩き

ガイドブックの分布や特徴を整理した有賀(2016)は『「街歩きマップ」は旅行者のみならず地域住民や外部の者に対しても有用な情報源となりうる』と指摘している。つまり、「西条とんどマップ」は地域住民が地域を知るための有効な学習材となり得るといえる。例えば新住民が、本ガイドブックでとんどを学ぶことで、地域のとんどに参加することを促す効果が期待できる。また、本研究は地域の協力者によって支えられたものであり、調査結果を協力者に還元することは、とんどを行っている人々がとんどの価値を再認識する可能性も指摘できる。

## ii) 『学校教育』における活用

学校教育においては、小・中学校社会科の地域学習の単元や高等学校地理歴史科の中でも地理総合の大項目「持続可能な地域づくりと私たち」の中項目「生活圏の調査と地域の展望」においてその活用が期待できる。

小学校社会科の地域学習といえば、産業学習や国土学習と並んで使用され、直接経験地域で展開されている人々の営みや諸施設などを対象とした第3、4学年の学習を指している。中学校段階においては今回、地域学習を「身近な地域の学習」に代表される学習活動とする。

地理総合は平成30年3月告示の新学習指導要領により、地理歴史科の中に設けられた標準単位数2単位の必修科目である。持続可能な社会づくりを目指し、環境条件と人間の営みと

の関わりに着目して現代の地理的な諸課題を考察する科目として、今回の改訂において新たに設置されたものであり、50年ぶりの地理の必修化が行われるものである。

平成29年7月告示の小学校学習指導要領社会編解説では、第3学年の目標には『身近な地域や市区町村の地理的環境、地域の安全を守るための諸活動や地域の産業と消費生活の様子、地域の様子の移り変わりについて、人々の生活との関連を踏まえて理解するとともに、調査活動、地図帳や各種の具体的資料を通して、必要な情報を調べまとめる技能を身に付けるようにする』とある。また第4学年では『自分たちの都道府県の地理的環境の特色、地域の人々の健康と生活環境を支える働きや自然災害から地域の安全を守るための諸活動、地域の伝統と文化や地域の発展に尽くした先人の働きなどについて、人々の生活との関連を踏まえて理解するとともに、調査活動、地図帳や各種の具体的資料を通して、必要な情報を調べまとめる技能を身に付けるようにする』とされており、新学習指導要領でも地域学習は維持されていることがわかる。

中学校段階においても平成29年3月告示の中学校学習指導要領第2節社会科の地理的分野の内容に『C日本の様々な地域』とあり、構成する大項目の一つに「(1)調査の手法」が確認される。中学校学習指導要領解説社会編(平成29年7月告示)によると、この具体的内容は『地域調査に当たっては、対象地域は学校周辺とし、主題は学校所在地の事情を踏まえて、防災、人

口の偏在、産業の変容、交通の発達などの事象から適切に設定し、観察や調査を指導計画に位置付けて実施すること』とされていることから、中学校段階においても地域学習の存在が認められる。

高等学校地歴科地理総合における中項目「生活圏の調査と地域の展望」に関してみると、平成30年7月告示の新学習指導要領解説ではその内容の取扱いを『「生活圏の調査」については、その指導に当たって、これまでの学習成果を活用しながら、生徒の特性や学校所在地の事情などを考慮して、地域調査を実施し、生徒が適切にその方法を身に付けるよう工夫すること』とされており、地域学習実施が望まれている。

一方で地域学習には課題が多い。小・中学校社会科の地域学習に関して、澁澤(2012)は『地域学習の最大の特色は直接的に観察調査できる地域が学習対象となっている点であり、その学習方法にフィールドワークが必須である』と結論付けている。小・中学校、高校いずれの段階においても、フィールドワークの必要性・有用性が認められるにも関わらず、フィールドワークは未実施であることが多い。宮本静子が2007(平成19)年に仙台市の中学教師128名を対象に行った調査によると、読図指導のみでフィールドワークを実施していない割合は実に74.2%を占めていた。池俊介が2012年に神奈川県の高学校(公立187校、私立78校、計265校、有効回答数124名)の地理担当教諭にアンケートを行ったところ、フィールドワークの実施率はわずか

21%であることが判明した。

小・中学校段階でフィールドワークが実施されない要因として竹内(2012)は地域調査に充てる時間の不足、高校入試に直接関係がない、生徒を郊外に連れ出すことのリスク、教師の力量不足などに並んで地域に即した資料の不足を挙げている。高等学校段階でフィールドワークが実施されない要因として犬井(1990)は①事故意識の高まり、②適切な実施環境の問題、③過密な教育課程や入試準備による実施時間の不足、④地理選択制⑤旅費などの予算、⑥事前準備に要する時間の長さ、⑦教員の指導力不足の7点に整理している

本研究の成果物である「西条とんどマップ」や添付資料であるとんどの写真は、地域の文化や伝統を学習できる地域資源であり、地域即した資料の不足という課題の解決の一助となる。また、本研究で行った「地域のとんどをしらべろ」という活動は、上記の②③⑤⑥の課題を解決できるものである。②適切な実施環境に関しては、とんどは周囲に建物がなく、開けた場所で行われるという特徴のため、多数の生徒で訪れることができ、また地域調査の対象も地域の伝統行事であるので、事例としては申し分ないと考える。③⑥に関しては、とんど祭りの多くは、1月の休日の1日で終わるという特徴のため、実施時間を多くとらない。また事前調査に要する時間の長さに関しても、調査フォーマットを作成しておけば、とんどの日時を調べて、とんどが行われる当日に参加するだけで良い。

ただし、とんどは火を使うという特徴があるので、①事故意識の高まりという点に関しては、保護者と共に参加してもらうなど対策が必要である。

筆者は上記に加え、疎遠となっている地域コミュニティと子供たちをつなぐ一つの方策として、とんどの調査が有効であると考えている。

## Ⅶ. おわりに

本研究では、東広島市旧西条町における伝統行事「とんど」の悉皆調査を行い、その分布と実態、「とんど」本体の形状の多様性を明らかにし、その成果をふまえ「西条とんどマップ」の作成を行い、本研究の活用方法を検討した。本研究の成果は以下のように要約できる。

- (1) 地理学的な悉皆調査により、とんどに関するオリジナルデータを集積した。2019年には99ヶ所で、2020年には91ヶ所で、重複を除くと2年間で、101ヶ所でとんどが行われたことを明らかにし、その分布を示した。また、62ヶ所のとんどの写真を採録した。
- (2) とんどの分布の要因や役割について聞き取り調査を行い、その立地条件を整理した。市街化区域では、もともと地域で行われていたとんどが、周囲の都市化などにより、とんどに適した場所がなくなつたため、学校に場所を変えて継続してい

ることを明らかにした。市街化区域では、人口の社会的増加が続き、比較的若い人が多いことも特徴である。小学校で行われるとんどは児童の地域学習のためだけでなく、住民同士の交流の場や新住民が地域コミュニティに参加する契機としての役割を果たしていることを示した。農業地域の小学校で行われるとんどが少ないのは、地域にとんどに適した田や畑などの場所が十分にあり、小学校で行う必要がないからと推測した。

- (3) 2019年と2020年の分布の比較を行うと10ヶ所でとんどの中止(未確認含む)が確認された。聞き取り調査を行い、とんどの廃止要因を、その立地条件という点から整理した。農業地域に位置する地点のとんどでは「高齢化による担い手不足」やそれに伴う「耕作放棄地の増加」、「リーダーの不在」が課題となり、農業地域と都市化地域の境界部に位置するとんどでは、「とんどに適した場所の不在」や「新住民の理解」が主要な課題であるといえる。
- (4) 採録された62ヶ所のとんどの写真をもとに、その形状を「骨組みの形状」、「芯の有無」、「柵の有無」という観点から整理したところ「四角錐・柵有・芯有」「四角錐・芯有・柵無」「四角錐・芯無・柵無」

「三角錐・芯無・棚有」「三角錐・芯無・棚無」「その他・芯有・棚無」「その他・芯無・棚無」の7パターンに分類できることを明らかにした。「四角錐・棚有・芯有」が27基、「四角錐・芯有・棚無」が23基、「四角錐・芯無・棚無」が8基と四角錐が9割以上を占めており、残りのパターンはそれぞれ1つであった。

- (5) とんどの形状を分類した結果を図化し、その傾向を読み取った。「四角錐・芯有・棚有」タイプは、西条町南部の農業地域を中心に、「四角錐・芯有・棚無」タイプは西条町の広範囲にわたり、「四角錐・芯無・棚無」タイプは西条町の北部の比較的都市地域を中心に分布していた。
- (6) とんどの形状と組み立てから焼き上げまでの日程のクロス集計を行い、傾向を明らかにした。「四角錐・芯有・棚有」タイプは比較的長期間飾られる場合が多く、「四角錐・芯有・棚無」タイプや「四角錐・芯無・棚無」タイプは製作直後に焼き上げられることが多い傾向を示していた。
- (7) 特徴的なとんど本体をもつ事例を記録した。この記録は、地域の実情を把握するための地域資料であり、生涯学習用の事例集としても活用することが可能である。

(8) 本調査で得られたとんどの分布や形状・写真を活用し、「西条とんどマップ」を開発した。生涯学習を行いたい一般市民や新しく入った住民が、本市で広く行われる伝統行事であるとんどを、視覚的に楽しく学べるよう作成した。また、学校教育現場での使用も念頭に置き、開発した。

- (9) 本研究が主に、『生涯学習やまちづくり』や『文化芸能』、『学校教育』の分野で活用できることを示した。開発された「西条とんどマップ」やとんどの写真集と事例集は、地域の文化や伝統を学習できる地域資源であり、学校教育の課題である地域即した資料の不足という課題解決の一助となる。さらにとんどを調べるという方法自体が地域学習の事例として有効である可能性を指摘した。地域コミュニティと子供たちをつなぐ一つの方策として、子供達によるとんどの調査が有効である可能性を指摘した。

今後の課題としては作成した「西条とんどマップ」や地域学習用の教材の有用性を検証し、市民の利用者や学校現場の需要に合わせて改善していくことが挙げられる。また、調査日程の都合上、2月に行われる14ヶ所の調査の内容を踏まえることができていない。これは論文提出後も継続して調査を行う予定である。

## 参考文献

- 阿部英樹監修 (2014) : 『保存版 ふるさと東広島』 株式会社郷土史出版会
- 有賀奈那 (2016) : 地域まちあるきガイドマップの分布と特徴—東京都 23 区内における JR 主要駅を事例として—. 法政地理, 48, 71-82.
- 池俊介 (2012) : 「地理教育における地域調査の現状と課題」『E-journal GEO』 vol17(1) 33-42
- 池俊介, 福元雄二郎 (2014) : 「高校地理教育における野外調査の実施状況と課題 : 神奈川県内の高校を対象としたアンケート調査結果から」『新地理』 62-1 pp17-28
- 犬井正 (1990) : 「地域の扱い方—野外調査実践の実態と今後の課題—」『地理学評論』 63A pp177-178
- 加藤友康・高埜利彦・長沢利明・山田邦明 (2009) : 『年中行事大辞典』 株式会社吉川弘文館 発行
- 川上光彦 (1994) : 『まちづくりの戦略—21 世紀へのプロローグ』 山海堂
- 澁澤文隆 (2012) : 地域学習. 日本社会科教育学会編: 『新版 社会科教育事典』ぎょうせい, pp96-97
- 西条町誌編纂委員会編 (1971) : 『西条町誌』 西条町.
- 竹内裕一 (2012) : 地域調査. 日本社会科教育学会編: 『新版 社会科教育事典』ぎょうせい, pp116-117.
- 田中宣一・宮田登 (2012) : 『年中行事事典』 株式会社三省堂発行
- 田中美子 (2004) : 「地域活性化のための生涯学習政策の在り方 : 自己組織性の視角から」 『千葉商大論叢』 42-3 pp143-169
- 寺本潔 (2012) : まちづくり学習. 日本社会科教育学会編: 『新版 社会科教育事典』ぎょうせい, pp114-115.
- 東広島市郷土史研究会 (1997) : 『東広島の歴史辞典』 東広島市郷土史研究会発行
- 宮本静子 (2009) : 「中学校社会科地理的分野『身近な地域』に関する実証的研究」『新地理』 pp57-3
- 民俗学研究所編 (1953) : 『年中行事図説』 株式会社岩崎書店発行

## 参考資料

国土地理院街歩きマップコンテスト HP

<http://www.gsi.go.jp/MUSEUM/SOUGO/H16moyo-annai5.htm>

にて 2020 年 1 月 31 日閲覧。

特定非営利活動法人 地域資料デジタル化研究会 デジタルアーカイブ班: 「小正月行事「どんど焼き」の全国・国際調査集計 (令和 2 年版)」

<http://www.digi-ken.org/~archive/koshogatu.html#wakayama>

にて2020年1月27日最終閲覧

東広島市教育委員会：「東広島教育振興基本計画」2016年12月1日最終更新

<http://www.city.higashihiroshima.lg.jp/material/files/group/73/30039362.pdf>

にて2020年1月31日最終閲覧

文部科学省：「小学校学習指導要領」平成29年3月告示

[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2018/09/05/1384661\\_4\\_3\\_2.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2018/09/05/1384661_4_3_2.pdf)

にて2020年1月31日最終閲覧

文部科学省：「小学校学習指導要領解説社会編」平成29年7月告示

[https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387017\\_003.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387017_003.pdf)

にて2020年1月31日最終閲覧

文部科学省：「中学校学習指導要領」平成29年3月告示

[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2018/05/07/1384661\\_5\\_4.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2018/05/07/1384661_5_4.pdf)

にて2020年1月31日最終閲覧

文部科学省：「中学校学習指導要領解説社会編」平成29年7月告示

[https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387018\\_003.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387018_003.pdf)

にて2020年1月31日最終閲覧

文部科学省：「高等学校学習指導要領」平成30年3月公示

[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2018/07/11/1384661\\_6\\_1\\_2.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2018/07/11/1384661_6_1_2.pdf)

にて2020年1月31日最終閲覧

文部科学省：「高等学校学習指導要領解説地理歴史編」平成30年7月公示

[https://www.mext.go.jp/content/1407073\\_03\\_2\\_2.pdf](https://www.mext.go.jp/content/1407073_03_2_2.pdf)

にて2020年1月31日最終閲覧



文部科学省：『平成18年版 文部科学白書』

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/hakusho/html/hpab200601/002/001/003.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpab200601/002/001/003.htm)

にて2020年1月31日最終閲覧